認知言語学と言語習得・言語教育

篠原和子（東京農工大学・認知言語学）

言語学が言語教育や言語習得の研究・実践にどのように貢献しうるかという問いは、近年の認知言語学の発展にともない、これまで以上に重要になっていると思われる。二十世紀以降、いわゆる現代言語学の成立後は特に、言語習得理論や言語教育法の基本的な考え方は、言語そのものの理論とともに変遷してきた。たとえば二十世紀前半にはアメリカ構造主義の記述言語学が盛んであったが、そこから刺激反応図式にもとづく言語産出の習慣化・自動化を目的とするオーディオ・リンガル法が提案され[1]、日本にも輸入されて特に英語教育の現場で実践された。その後、チョムスキーの言語理論[2]の影響が増すと、認知主義が主流となり、主体的言語使用が重視され、強制的な文法反復練習はむしろ批判される傾向が生じた。さらに、GDM, TPR その他の様々な言語教育法が次々に提案される時期が続き、社会言語学や談話分析の成果も言語教育に盛り込まれる時代となって今に至る。

認知言語学は、1970年代にその発祥が認められるが、チョムスキー派の理論言語学から分かれてレイコフ、ラネカーらによって1980年代に打ち立てられた[3][4][5]。意

味や概念化、言語以外の認知能力と言語能力との関係、言語使用と言語構造の関係などを研究の中心に据える点がそれまでの理論言語学とは異なっていた。二十世紀後半から急速に成果を上げるようになった認知心理学や脳神経学の成果を言語理論に採り入れた学際的研究を進めており、言語習得・言語教育への応用ではトマセロの「使用基盤モデル」の理論を擁している[6]。また、サピア=ウォーフ仮説とも呼ばれている言語相対論の思想を現代的に再構成し、多数の異なる言語の話者への心理学実験を通じて実証的に言語と思考の関係を探求する立場も、認知言語学内にはある。理論言語学の流派のなかでは最も現場の言語教育やマルチモーダルな言語習得場面に応用できる可能性を秘めた理論とあってよいだろう。

今回、東京外国語大学で行われた共同研究発表会は、「認知の異なりが言語教育および言語習得に及ぼす影響－海外日本語教育インターンシップ実践の記録、および産出データからの考察」という共同研究テーマのもと、海外日本語教育インターン派遣の成果を発表し共有するとともに、認知の異なりが言語教育および言語習得におよぼす影響という、きわめて重要な課題を扱ったものである。日本語教育の現場に携わる教師たちの経験、思想、実践といった幅広い視点からこれらの課題に取り組み、成果をあげた。現場から理論、理論から現場へのダイナミックな橋渡しが試みられたこと、また、ややもすると欧米の言語、特に英語教育が中心になりがちな応用研究の状況に

あって日本語教育に焦点を当てた点には、特に大きな意義があったと思われる。

認知言語学の成果は、各言語の文法構造や語彙構造、意味構造、空間認知や時間認知、メタファーや主観性、音象徴、といったさまざまな項目について蓄積されている。

それらの成果を、今後も言語教育や言語習得の研究に大いに利用していただきたいと願う。

References

- [1] Fries, Charles C. (1945) *Teaching and Learning English as a Foreign Language*. The University of Michigan Press.
- [2] Chomsky, Noam (1957) *Syntactic Structures*. Mouton.
- [3] Lakoff, George, and Mark Johnson (1980) *Metaphors We Live By*. University of Chicago Press.
- [4] Lakoff, George (1987) *Women, Fire, and Dangerous Things: What Categories Reveal About the Mind*. University of Chicago Press.
- [5] Langacker, Ronald W. (1987) *Foundations of Cognitive Grammar: Theoretical Prerequisites*. Stanford University Press.
- [6] Tomasello, Michael (2005) *Constructing a Language: A Usage-Based Theory of Language Acquisition*. Harvard University Press.